

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.84

2005年6月29日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp *アドレスが変わりました



表紙絵 ブルブル・サイドとサルタン 甲斐大策

第一弾500ヘクタールの灌漑始まるー2004年度を振り返って

中村 哲

2004年度会計報告

ペシャワール会事務局

将来見据え継続する灌漑事業

村上 優

井戸掘り事業は最終ラウンドです

芹沢誠治

ダラエヌール診療所へのニーズが高まっています

紺野道寛

ようやく人心地のつく宿舎ができました

松永貴明

農業計画の一年

高橋 修

熱砂のアフガンで「身体」を取り戻しました

杉山大二朗

大工事から買い物まで、全てに助け合った二年間

鈴木祐治

用水路は想像を超えるスケールでした

井上龍一郎

憧れのシスターに会えて

溝口博子

アフガン閑話その2・クーチャー

鬼木 稔

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

第一弾500ヘクタールの 灌漑始まる

「対テロ戦争」とは、実体のない亡霊との戦いである。こんなものに先人たちの死を無駄にし、私たちの子供たちを供えてはならない。平和は軍事力で達成できないことを私たちは見てきた。砂漠からよみがえった緑の大地に立つとき、文字通り地についた平和な感情に支配される。そして、この実感は座して得られたものではなく、命の尊さを共有しようとする努力の結実であることを知る。日本から遠いアフガニスタンの農村地帯にあって、本当の平和が実感できる幸せを感謝したい。

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長 中村 哲

2004年度を振り返って

狂気の時代である。グローバリズムが国際暴力主義と結合して、面妖な世情になってしまった。だがアフガニスタンでは、今に始まったことではない。もう二十年以上前の「ソ連軍侵攻」から現在の状態は先取りされていた。即ち、文明の普遍性と正義の名において、軍靴が平和な農村を踏みしめ、無数の犠牲を生み出してきたからである。

滅びた「正義」に、別の「正義」がとって代わる。時には、「民主主義」や「平和」の仮面をかぶって戦争が正当化される。だが、その実態は、少なくともアフガニスタンでは明瞭である。私たちは、いとも簡単に市民社会だとか、市民運動だとかを語るが、途上国の一般大衆には先ずもって「市民権」がないことを報告しておきたい。何百万の人々が死亡しても、まるで「市民」のペットが死ぬよりも軽いことであるかの如く報ぜられる。そして、その報復があることを「国際社会」が漠然と恐れる。不安は現実化する。共通の敵意と不安を共有して世論が動くとき、恐るべき破局が待ち受けていることを知らねばならない。みな、だまされてはならない。このような「正義」が、そんなに長続きするものではない。

平和を語るに消極的な日本の民心を眺めるとき、漠然と「生活や身を守る戦争なら……」という無力感と不安が忍び込んでくるのを観る。戦後、日本の民心を正気に連れ戻してきたのは、吾々の先人たちの無数の血の犠牲、その記憶たる戦争体験であった。日本は加害者であり、同時に被害者でもあった。そして、その限りにおいて、日本は



地元の長老なども参加して執り行われた第二次通水式

「平和」の発言者たり得たのである。今まさに、先人の犠牲の結実たる平和憲法の改正が、現実の虚像に基づいて大した抵抗もなく受け入れられようとしているのは、耐え難いことである。

「対テロ戦争」とは、実体のない亡霊との戦いである。こんなものに先人たちの死を無駄にし、私たちの子供たちを供えてはならない。平和は軍事力で達成できないことを私たちは見てきた。砂漠からよみがえった緑の大地に立つとき、文字通り地についた平和な感情に支配される。そして、この実感は座して得られたものではなく、命の尊さ

を共有しようとする努力の結実であることを知る。日本から遠いアフガニスタンの農村地帯にあつて、本当の平和が実感できる幸せを感じたい。敵は吾々の内にある。

2004年度の概況

1 概況

二〇〇一年十月の米軍による「アフガン空爆」以後、翌年二月の復興支援東京会議で沸いたアフガニスタンは、すでに忘れ去られたように見える。この間、世界の耳目は首都カブールの政局の動向にのみ注がれ、一見安定したかのような印象だけを残した。「アフガン復興」の結末は今でこそ、謙虚に総括されるべきである。

米軍による「アルカイダ討伐作戦」は、なお続いており、東部地域（クナール州、パクティア州、ザブール州、ヌーリスタン州など）の戦闘はむしろ拡大している。米軍は初めの一万二千名から一万六千名に増強され、連日各地で米軍襲撃や爆破事件が絶えず、治安は明らかに悪化している。〇四年九月、カルザイ政権が正式の選挙手続きを経て、新内閣を発足させたものの、権力の及ぶのは依然として点と線である。

五年目の旱魃（かんばつ）はやはり厳しく、農業国家たるアフガニスタンの食糧自給率は六十パーセント以下に落ちた。故郷で暮らせぬ農民たちが、イラン・パキスタンから帰還した難民と共に、職のないまま大都市にあふれ、政情の不安定化に貢献している。ジャララバードでは、〇五年五月、米兵による「コーラン冒流事件」が伝えられるや、街頭デ

モが半ば自然発生的に起き、学生二名が射殺された。このため、暴徒化した群衆が国連や外国NGOの事務所を襲撃、一時東部の支援活動はマヒ状態に陥った。

各地に飛び火した暴動は、追い詰められた住民たちの心情の一端を物語るものであった。大衆の多くが無言の支持を与えていたからだ。アフガン空爆と復興ブーム以後の一連の動きは、必ずしも飢えた大衆の救済に役立ったとは言えない。一触即発の危機は、銃剣に守られる復興支援」が続き、消滅しないことが浮き彫りにされた。

国民の貧窮は至る所で矛盾を生み出した。米軍に擁立されるカルザイ新政権でさえ、「援助の大半が外国団体を通して与えられ、有効に活用されない」との強硬意見が主流となり、〇四年九月、大幅な外国NGOの淘汰に乗り出したが、NGOを担当する経済省大臣が辞職する一幕もあった。

〇四年前半、アヘン生産は急増を続け、世界の麻薬の七割以上をアフガニスタン一国で占めるに至った。〇五年になって、六年ぶりに降雨・降雪が見られ、旱魃は和らぐ気配を見せている。しかし、長期的には、温暖化の過程の一休止期としか思われない。

PM S（ペシャワール会医療サービス）は、これまでと少しも変わらず、アフガン東部の活動を続けてきた。飲料水源（井戸）は千四百ヶ所を超え、三十五万人の離村をくい止め、「難民帰還」に貢献したとはいえ、砂漠化による農村の荒廃は目を覆うばかりであり、〇四年度は全力を用水路建設に傾けた。

病死の背景には不衛生と栄養失調があり、十分な食糧（農業生産）と清潔な飲料水こそが、健康

と平和の基礎であり、国家再建の柱だという確信は、今後も変わらない。また、遠からず来る米軍の撤退による混乱を思えば、最優先を灌漑計画に置かざるを得なかったのである。〇五年四月、用水路建設は着工から二年にして最難関の岩盤地帯（取水口部から四・八km）を突破し、五月二十日、公式に「クズクナル地域約五百ヘクタールの灌漑成功」を地方行政に伝えた。工事はにわかに進展し、六月九日現在、全長十四km中、工事の先端は十・四kmに延ばされ、七km地点までの導水を確認した。

しかし、活動の建て直しを余儀なくされること



用水路D1地点の遊水池で泳ぐ子供たち

もあった。医療活動では、医師層の流出に悩まされ、かつ米軍の活動が奥地にまで及んで職員が安全が保たれなくなった。○四年一月、九二年以来続いたダラエビーチ（沖縄ピース・クリニック）、ワマ（ヌーリスタン）の二診療所を涙を呑んで行政側に譲渡、PMSのアフガン内診療所をダラエヌール溪谷（人口五万）に絞った。飲料水源事業では、帰還難民の急増によって活動地が広大な地域に拡散、管理困難に陥って、現在態勢を立て直している。

試験農場では、飼料生産でアルファルファが根づき、イモ類などで一定の成果が上がったが、成果を論ずるのはまだまだ先である。

2. 医療活動

二〇〇四年度は、ダラエビーチ診療所（沖縄ピース・クリニック）、ワマ（ヌーリスタン）診療所の二つを失った。その顛末は会報八十三号に紹介したので繰り返さない。これが軍事活動Ⅱ復興支援の結末かと、病院職員一同が悲しみ、寒々とした気分にならざるを得なかった。だが、住民の陳情に依って、「一時撤退」の姿勢を崩していない。長期的には、住民に必要とされる限り、戻りつものである。

パキスタンのラシチュト診療所、アフガニスタン・ダラエヌール診療所はこれまで通り。特に唯一残されたアフガン側の診療所では、地域全体をPMS管轄とし、より質の高い診療充実を目指している。

ベシワール基地病院は、数少ないアフガン難民の診療施設として、逆に重要性を増している。殆どの医療団体と医師層がカブールに移ったにも

かわらず、貧困な難民層は依然としてベシワールにも多数存在する。また、ハンセン病の合併症をまともに診療できる施設が皆無の中、他病院と競合せぬよう、皮膚・神経疾患を重点的に診られるよう配慮している。年度実績は表1～3の通り。

3. 飲料水源（井戸）事業

○五年三月末現在、作業地、利用可能な水源数は表4のとおり。しかし、この中にはトルハム国境のように、大きな給水塔を備えて数本で地域全体（約五千名以上）をまかなうものから、僅か数家族しか使えぬものまで、様々である。さらに、ダラエヌール・ブディアライ村のように人口の少ないところに密集したり、アチン郡のようにまばらに散在するなど、地域によってまちまちである。○四年度はこの状態をいったん解消、数は少いが恩恵が多くの人々に及ぶよう、態勢立て直しの努力が開始された。

4. 農業関係

飼料生産で実が上ったと思えるものは、アルファルファの普及である。「シャフタル」という現地のもの（アルファルファ原種）よりも明らかに優れており、徐々に一般化している。サイレージの簡便法は、その効果判定に時間がかかりそうである。イモ類も一時期、期待を持たせたが、これも調理法など、現地の好みに合わせる努力が要る。

換金作物として有望な茶の栽培は、土壌の改良（弱アルカリ性土壌の中和）、日射量や湿度の調整で苦心しており、○四年度は試験農場をダラエヌール溪谷上流、標高約二千mのウェーガル村に拡

大、地道な努力が続けられている。

5. 用水路（真珠川）事業

二〇〇三年度以来、最大の力を注いできた本事業は、着工から二年、○四年度末になって、やっと本格的な展望が開けた。○四年四月に始まった沈砂池（取水口から一・六km）造成は、一年がかりで完成、これによって夏の濁流を清水に変え、浚渫の手間がかからぬ質の良い水を送れるようになった。

両端に挿し木したコリヤナギの成長は予想以上で、時期の良かったものは、一年で四メートル以上成長、取水口から沈砂池まで緑のベルトが続いている。現在約六km地点まで、水路沿いに更に



用水路G地区。5月の通水でつ田畑への灌漑が始まった

六万本が挿し木されて緑を伸ばそうとしている。

また、現地の専門家をして「奇跡」と呼ばしめた高い岩崖周り（取水口から四、五km地点）の水路は、周囲一・一kmの長さにわたって、高さ十七m、幅四十m以上を埋め立てて頂点を掘削、蛇籠（ふとん籠）を両岸の骨格とし、PMS独自で開発した軽量セメント（現地の一般的な土である「ハウル」に二割前後のセメントを混ぜたもの）を岩石の隙間に流し込み、成功したものである。一般に盛土上のセメント構造の水路は、ヒビが入ると隙間から漏水、泥土が流出して大きな決壊につながるが、使

表1

診療所	外来数	外傷治療数	入院数
PMS 基地病院	39,675	4,239	1,291
ラシュト診療所	4,754	157	
ワマ診療所	10,228	773	
ダラエ・ピーチ診療所	31,519	1,591	
ダラエ・ヌール診療所	43,747	1,530	
計	129,923	8,290	1,291

用した「軽量セメント」は、表面は一見モルタルに似ているが、土の性質を残しているので、小さな漏水があれば膨張した粘土塊となつて隙間を詰める。一ヶ月間水を流し続けて観察、殆ど漏水しないことを確認し、〇五年五月二十日、公式に「クズクナール地域四百八十ヘクタール灌漑」をニングラハル州政府に

報告した。

水路の梗概は七頁の報告書の通り。流量は予想をはるかに上回り、最大可能流量が毎秒八トン以上、その十パーセント以下の分水量で、小麦やトウモロコシなら五百ヘクタールを灌漑できることが実証された。損失水量を考へても、確実に数千ヘクタールの早魃地帯を灌漑し得る。工事の速度は、一挙に加速された。〇五年六月九日現在、工事の最先端は十・四km地点まで一気に伸び、七km地点までの通水を確認している。

6. ワーカー派遣事業

〇四年度に送り出されたワーカーは別表5の通り。二十代の若者の活躍に、六十才前後の年長者が加わり、大きな成果を挙げている。

05年度事業予定

(1) 医療活動

ペシャワール基地病院はハンセン病および類似疾患、皮膚・神経疾患に重点を置いて改善し、診療の量よりも質を高める方針をとる。アフガン内のダラエヌール診療所は、渓谷全体の人口をより充実して診療し、モデル・ケースとなるよう集中する。医師数は激減したが（八名）、活動地域の縮小があり、十分可能である。

(2) 井戸事業

上半期は完成井戸の住民への譲渡・自主管理を徹底して進め、下半期から公共性の高いもの（数少なく且つ受益者の多いもの）を着実に積み上げてゆく。住民が独力で出来るものは手につけない。

(3) 灌漑事業

マルワリード（真珠）用水路の十km地点までの年内完成。ブディアライ村の暴れ川の治水。最終地点までの用地収用を確実に進める。

(4) 農業関係

引き続き、茶の栽培の試み、家畜飼料などの研究を行う。

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十一年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十三万人（二〇〇四年度）。

表2 各診療所の診療数と検査権数の内訳

国 名	バキスタン		アフガニスタン		
地 域 名	ベシャワール	ラシュト	北東部山岳地帯		
病院・診療所名	PMS	ラシュト	ダラエ・ヌール	ダラエ・ビーチ	ワマ
外来患者総数	39,675	4,754	43,747	31,519	10,228
(内訳) 一般	38,662	4,745	40,765	29,596	9,877
らい	75	2	1	6	0
てんかん	699	1	261	90	10
結核	63	0	17	2	0
マラリア	176	6	2,703	1,825	341
入院患者総数	2,334	-	-	-	-
(内訳) らい	169	-	-	-	-
らい以外	1,122	-	-	-	-
外傷治療総数	4,239	157	1,530	1,591	773
手術実施数	33	-	-	-	-
検査総数	24,568	2	7,282	7,291	355
(内訳) 血液一般	2,926	-	1,032	909	30
尿	2,865	-	1,215	1,343	65
便	1,904	-	1,125	1,478	112
高酸性桿菌	293	-	0	76	0
マラリア	1,785	1	3,231	2,828	148
リーシュマニア	-	-	-	-	-
その他	14,795	1	679	657	0
リハビリテーション 実施総数	7,045	-	-	-	-
サンダル・ワーク ショップ実施総数	117	-	-	-	-

表3 PMS病院検査数の内訳

血液	2,926	心電図	768
尿	2,865	超音波断層写真	4,175
便	1,904	心エコー	214
らい菌塗抹検査	113	細菌	0
抗酸性桿菌	293	体液(髄液・胸腹水等)	24
マラリア血液フィルム	1,696	その他	2,052
リーシュマニア	89	内視鏡	542
生化学	3,012	病理組織検査	0
レントゲン	3,895	小計	24,568

表4 水源確保事業の現状

() 内は完成した井戸・修復したカレーズの数 (2005年3月26日現在)

	飲料井戸	灌漑井戸	カレーズ	計
ダラエ・ヌール	400 (337)	11 (9)	38 (38)	449 (384)
ソルフロッド郡	538 (447)			538 (447)
ロダト郡	256 (225)			256 (225)
カイバル峠	4 (2)			4 (2)
アチン郡	171 (171)			171 (171)
スタッフ用	20 (17)			20 (17)
その他	15 (11)			
Total	1404 (1210)	11 (9)	38 (38)	1453 (1257)

表5 現地派遣ワーカー

氏 名	職 種	派遣開始	現在	氏 名	職 種	派遣開始	現在
◆医療 (PMS病院)				16 本田潤一郎	用水路	2004年1月	継続中
1 藤田 千代子	院長代理・看護部長	1991年9月	継続中	17 松永 貴明	支部会計	2004年4月	継続中
2 中山 博喜	会計担当	2001年4月	継続中	18 進藤 陽一郎	農業計画	2004年5月	継続中
3 仲地 省吾	医局長	2002年2月	2005年2月終了	19 神戸 秀樹	井戸担当	2004年5月	継続中
4 T.M.	連絡員	2002年7月	2004年10月終了	20 鬼木 稔	用水路	2004年5月	継続中
5 坂尾 美知子	臨床検査技師	2002年7月	継続中	21 重住 正幸	事務	2004年9月	継続中
6 鈴木 祐治	ベシャワール事務所	2003年6月	継続中	22 西野 大介	用水路	2004年9月	2005年7月終了
7 紺野 道寛	ダラエヌール診療所薬局	2003年7月	継続中	23 杉山大二郎	用水路	2005年2月	継続中
◆水利・農業計画 (ジャラバード支部)				24 村井 光義	事務	2005年3月	継続中
8 川口 拓真	用水路	2002年3月	2005年1月終了	◆定期・短期派遣者			
9 橋本 康範	農業計画	2002年6月	2005年3月終了	25 高橋 修	農業技術顧問	2002年3月	定期派遣
10 宮路 正仁	井戸担当	2002年11月	継続中	26 石橋 忠明	用水路	2003年12月	短期派遣
11 近藤 真一	用水路	2003年1月	継続中	27 紺野勝寛	機械整備	2004年6月	短期派遣
12 清宮 伸太郎	用水路	2003年2月	2004年2月終了	28 前田 裕之	診療放射線技師	2004年4月	短期派遣
13 鈴木 学	用水路	2003年3月	2005年3月終了	◆2005年度新規ワーカー(2005年7月初現在)			
14 大越 猛	事務・連絡員	2003年4月	2004年4月終了	29 芹澤 誠治	井戸担当	2005年4月	継続中
15 伊藤 和也	農業計画	2003年12月	継続中				

朗報 砂漠が水郷に！ 中村哲

小麦の収穫を前に、雨乞いしていた農民には青天の霹靂、突然背後を突くように大量の水が流れてきたので、大変な騒ぎと喜びに包まれていました。これまで、「irrigation project（灌漑計画）」と称するNGOや国連の看板は多く目にしましたが、何れもポンプ小屋を設置するだけで、川の水を汲むにも8時間で1ジェリブ（約2000平方メートル）当り、120ルピー要りました。ヘクタール当り600ルピーですから、いくら現金収入を得ても、維持費に消えてしまいます。また、農村女性にとって何が辛いかといえば、水汲みでした。彼女らの日課のひとつが川からの水汲みです。それが、家の前に水が来る。村人たちの喜びは想像できるでしょう。

なお、天水と川水のポンプ汲み上げでかろうじて農耕していたのが、約800ジェリブ（160ヘクタール）で、これも分水路の灌漑可能面積に入れています。

また、クズクナルの低地はシェイワ地域に連続しています。シェイワの中心部は旱魃でも生き残るほど水が豊かですが、問題は冬のクナル川の水位です。取水部の改修を繰り返しても、多量の土の粒子を含む濁流が川を埋めてしまい、冬の取水が困難になります。そこで、この分水路をシェイワ盆地地上流の水路網に連結すれば、秋と冬の水欠乏は解消します。いったい、どの程度の水量が必要か、調査を進める予定です。

シェイワ郡の山側は、最も旱魃がひどく、数千家族が難民化していると見られています。これについては、PMSの主水路が2年後に到着すると、大半は潤せると見えています。

水路工事はまだ半ばですが、PMSを支える日本側とアフガン側の並々な協力により、この事業がやっと第一弾の灌漑に至ったことを、感謝と喜びを以て報告します。

●灌漑用水路建設工事の進捗状況（2005年4月現在）●

最難関の4～5km区間（FとG地区）を無事突破、分水路とサイフォン部を完成、4月5日に再確認して、翌日6日よりクズクナル方面、翌日7日よりスランプール平原部へ灌漑を始めた。現在、水路はさらに延び、4月15日現在、サイフォンから1300m地点を完成した。概要は以下のとおり。

1. 取水口から末端まで主水路の最大許容流量；毎秒8トン以上

2. クズクナル、スランプールへの分水流量；毎秒0.6～1.2トン

3. 現在確定した予定灌漑面積；
クズクナルで約2000ジェリブ（＝400ヘクタール）
スランプールで約400ジェリブ（＝80ヘクタール）
合計約480ヘクタール

4. 水路の概要

●取水口

斜め堰；長さ220m、幅10～20m

水門；堰板方式（上水の取水）、幅1.5m×3門、取水口部水底の標高633.5m

●2003年度に完成したABC区域；

全長1600m、蛇籠・柳枝工による護岸、幅6.0m、傾斜0.00125、余裕高1.0m以上

●遊水地（D1区域）

主に沈砂池、流量安定の貯水池として機能。短径330m、長径480m、円周約1.2km、水深3～6m。

水門は三連アーチの堰板式（幅2.0m×3）、高さ3m、排水門2.0m×1、浚渫用に排水門下部に連続して深1m×幅1m×長さ16mの溝。

道路と接する堰堤は、全長330m、底部幅20m、高さ水底より8m、巨石を核に土石を入れ、全周斜面を柳枝工で保護。道路側は石組で根固め工、斜面は芝生工で保護。

●D2区域；

全長398m、幅10m以上、余裕高2m、傾斜0.0003

●水道橋；幅2.5m、高さ1.6m、長さ18m。水深1mの許容水量は毎秒12トン

●E地区水路；

全長1300m、幅6m、余裕高2～3m、傾斜0.0007。水深1mまで蛇籠・柳枝工で護岸

●涸れ川横断暗渠；全長20m

●道路横断暗渠（EとF区間の境界）；全長12m

●F区間水路

埋立ての上、掘削（埋立高5～14m、底部埋立幅30～40m、埋立部傾斜30～40度）。全長600m、幅5.5m、護岸は蛇籠工・軽量セメントモルタルで施工、余裕高1.0～1.5m、傾斜0.0008

●G区間水路

全長500m、幅5.5m、埋立ての上、掘削（埋立高15～17m、底部埋立幅40～45m、埋立部傾斜35～40度）。右岸は岩盤、左岸はF区間と同様の護岸。傾斜・余裕高はF区間に同じ。岩盤側はセメントミルクで岩の空隙を埋めて密閉。

●サイフォン・分水部

分水門；幅0.6m、高さ3m。許容分水量；水深1m全開で約2トン

サイフォン部；道路横断暗渠。長さ16m、水深1m時の許容流量毎秒16トン

標高は629.25m、取水部との落差4.25m下、クナル川水面との落差は約18～20m上。

●H1遊水地

全長300m、幅7～30m、水深3～6m、堤防の構造は次のH1に同じ。

●H1水路（スランプール盆地前半）

全長1000m、幅約10m、傾斜0.0003。余裕高1m以上。堤防護岸は斜面底部に巨石を置き、大小の岩石や碎石で厚さ約0.8mの層を作り、土砂を掩蔽、植樹で保護。

2004年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。

期間 2004年4月～2005年3月

一般会計 (単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	228,519,876 ①
2 補助金等	0
3 収益事業収入	0
書籍等販売収益	0
4 利息雑収入	23,083
5 その他収入	0
年度収入計	228,542,959
前年度繰越	285,601,898
収入計	514,144,857

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	1,337,560
カレンダー等売上	4,493,600
ビデオ売上	1,746,000
売上収入計	7,577,160
雑収入	601,440
事業収益合計	8,178,600

[経費の部]

書籍原価	1,293,032
カレンダー制作・販売費	4,306,000
ビデオ制作費	1,470,000
送料等経費	613,516
経費合計	7,682,548
事業税	519,600
当期収益 (一般会計繰入)	-23,548

[支出の部]

1 現地協力費	480,927,103
うちPMS運営費	81,828,828 ②
井戸掘り事業	50,694,408 ③
農業支援事業	800,438 ④
灌漑用水路	265,886,993 ⑤
アフガン事務所	59,766,032 ⑥
現地ワーカー費	9,562,469 ⑦
渡航費	6,598,005
国内活動費	5,789,930
2 広報費	6,229,678
3 事務局費	21,258,480
年度支出計	508,415,261
次年度繰越	5,729,596
支出計	514,144,857

未使用切手、書き損じ葉書の寄付

寄付いただいた件数	1,368件
未使用切手枚数	127,041枚
未使用切手金額	5,412,554円
書き損じ葉書枚数	36,593枚
書き損じ葉書金額	1,725,653円
合計金額	7,138,207円

* 会報発送費用等の節約になっています。

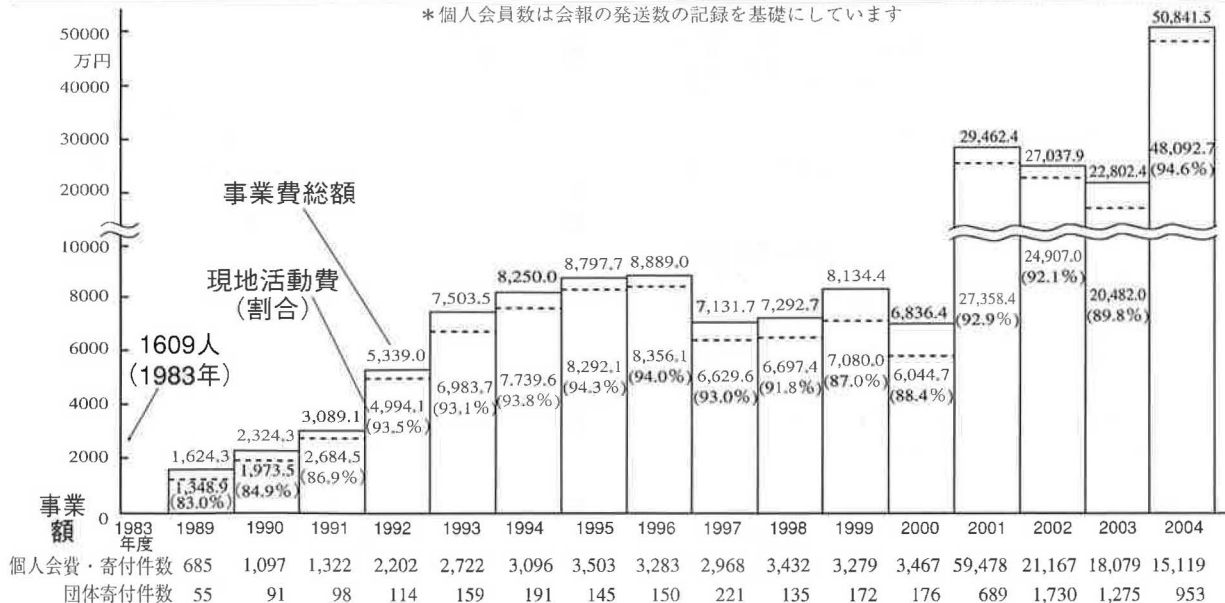
- ①個人会費・寄付15、119件、団体寄付953件
 ②パキスタン・アフガン診療所
 ③飲み水等供給事業
 ④作物育成試験等
 ⑤農業用灌漑用水路建設
 ⑥ジャラバード事務所
 ⑦日本人ワーカー費

'04年度会計報告

● 2004年度事業額 (支出ベース)
508,415,261円

事業規模 (寄付件数・事業額) の推移

* 個人会員数は会報の発送数の記録を基礎にしています



●現地視察ツアーに同行して

将来見据え継続する灌漑事業

一年ぶりの訪問

四月一日よりペシャワール会事務局のボランティア九名で、ペシャワールとアフガニスタンを訪問した。

私にとっては丁度一年ぶりの訪問にあたる。中村哲医師より事務局員も現地を直接見る機会を持つように要請されて希望者を募り、このメンバーとなった。特筆すべきは女性が三名含まれて、初めてトルハム国境をこのメンバーで越えたことである。これまでのペシャワール会の活動と現地の細心の準備があつて実現したのであり、現地活動の傍ら負担をかけたのではと感謝で一杯である。この時期にしては例年になく涼しく、真夏の暑さを覚悟していたのだが、楽な行程であつたのも幸いした。

PMS病院は医師メンバーが大きく変わつていたが、ジア副院長やイクラム事務長、看護師や検査技師、薬剤師、運転手の懐かしい顔が多く見られた。一人ひとりハグをして挨拶すると、無事に生き抜いて再会した実感に感動する。診療風景は変わりなく、多くの外来患者、急性感染症を中心にハンセン病や結核の慢性期の患者も入院していた。腸チフスの子

ペシャワール会事務局長 村上 優

供が二人入院しており、入院して間もない子供はまだ重篤感が漂っているが、二週間もして退院間近の子供は元気にしていた。まだここでは治療を受けることが当たり前のことであるとはいえない。

休みの日には国境沿いの難民キャンプ跡を見に行き、広い荒野が残されていた。ペシャワール市内は初めて訪問した十年前とは異なり道路は舗装され、灯りが点され、人々もきらびやかに見えるが、その反面で反政府運動も盛んで米軍によるアフガン空爆後の戦争の鬱積が感じられる。旧市街などバザールも自由に歩くことは差し控えるように注意を受けた。

トルハム国境を越えるにはジア副院長の先導があつてスムーズに越えることができた。国境にはPMSが掘つた二本の井戸が稼動し、更に二本が完成間近である。トルハムのバザールに簡易の水道が設けられ今はその風景がすっかり馴染んでいたが、二年前までは水を得ることはできなかった。国境を越えると全くの岩石砂漠だった昨年と異なり、地面を薄いい緑が覆っている。今年はこれまでより雨が多く降つたという。その緑が山に続いているのを見ると、

この緑を追って遊牧民が羊を移動させるわけが理解できる。黄色やピンク、紫の花も咲き誇り、気持ちウキウキするが、急に立ち現れる米軍の基地が周囲の景色に違和感を与えた。

灌漑用水路の規模に圧倒される

ジャララバードの事務所とスタッフハウスに着くと、懐かしい顔が迎えてくれる。日本人ワーカーも遊水池の水門やスランプールまで到達した用水路の工事に余念がなく、忙しく立ち働いてた。ここで初めて農地への灌漑が可能になる。自分たちで分水路を作り水が畑に流れる感激の余韻が残っていた。この水路の規模は、見るものを圧倒する。

ダラエヌール診療所は二百人を超える外来患者でごった返していた。既にマラリアの患者が出て、患者の血液からマラリア原虫も検出されていた。一九九三年のマラリア大流行の混乱を思い出すが、今は風邪や下痢症と変わらない疾患として治療さえあれば恐れる必要はない。

農業計画ではお茶が苦戦の中でも三年を越え、堆肥で土壌を酸化させたりと試行錯誤がしのばれた。アルファルファなどの牧草や、サツマイモ、サイレージによる飼料の発酵など、この地に適する農業の模索は、現在の灌漑事業の先を作り出す生命の予感がする。これらの事業を目の当たりにして、現地の人々と同じ目的、気持、喜び、苦労をしている中村哲医師を初めてした日本人ワーカーに感動し、この活動を支えることを強く意識づけられる訪問であつた。

*ワーカー通信

井戸掘り事業は
最終ラウンドです

水源確保事業担当 芹沢誠治

井戸のハンドオーバー（住民への譲渡）

私は、何かできることがあるかもしれないと、それまでやっていた小さな学習塾をたたんで、この四月にアフガニスタンにやって来た、新入りのワーカー見習いです。中村先生はたぶん、私の六十三歳という年齢と井戸屋の小せがれという出自を考慮されたのでしょう、私は井戸セクションに配属されました。子供の頃の家族総出のトヨ打ちで、初めて水が出たときの感動がよみがえり嬉しかったのですが、私の仕事は井戸を掘る手伝いというよりも、できあがった井戸をハンドオーバー（住民への譲渡）することでした。

というのは、私が到着する直前の三月末に、PMSはもう新たに井戸を掘らないこと、井戸部門をできるだけ早く閉じる方向であること、を決定していました。これにはいくつかの理由があります。一つには、PMSがこの五年間で実に千四百本以上の井戸を掘り、すでにその役割を十分に果たしたということ。二つには、用水路の建設に莫

大な予算を必要とし、井戸部門を縮小せざるを得ないこと。三つには、この五年間に戦後のアフガン社会が変化し、パブリックな性格を持っていた井戸が、プライベートな性格を持ち始めていますが、PMSは公共的共同使用の目的で井戸を掘っており、私的所有のための井戸は掘らないという態度の表明だと思っています。ただし、今後も住民のためにどうしても掘る必要がある時は、新しい井戸を掘るといふ基本姿勢を、PMSは持ち続けていくでしょう。

ハンドオーバーとは、数ヶ月かかってようやく水が出るようになった井戸を、住民の人たちに完全譲渡することです。完成するまでPMSの管理下にあった井戸が住民の所有となるので、必要となる道具一式（シャベル・つるはしなど十五点）をPMSが貸与するが、今後は井戸の修理やリハビリを、住民たち自身の手で行うという契約を結ぶこととなります。これには、一つにはPMSの維持費の削減、もう一つには、住民の自立を促すという二つの大きな意味があります。

廠戒態勢の譲渡式

私の最初の仕事は、直径5m以上ある灌漑用井戸を五本ずつ二ヶ所でハンドオーバーすることでした。大抵の事には驚かないつもりでしたが、これには少し驚きました。ハンドオーバーの会場（木陰の大きな広場）に行く前に、パキスタンから来られたジア副院長以下、最初に立ち寄ったのは警察署でした。カラシニコフをもった四名の警察官と調停役と思われる二名の立会人と会場に向かっ

たときは、いったいこれから何が起こるのかと、少しばかり心配になりました。会場には地域の長老たちを含め三十名以上が集まり、アフガン人特有の大声でカンカンガクガク、法律の専門家と思われる調停役がだめにまわる、警察官は銃を背に監視している、バシュトー語で何を話しているのか分からないだけに、不安がつのります。しかし一転、会議が終わるとみんな笑顔で抱擁し、和気藹々で終わりました。ふーむ。

その後のハンドオーバーはずっと簡略化したものになって順調に進み、六月に入って、全体であと百五十本以下となりました。しかしハンドオーバーが進むにつれて、もう一つの重大な仕事、ロダットとダラエヌールとジャララバードのオフィスの井戸部門の閉鎖が浮かび上がってきました。井戸部門の閉鎖とは、この五年の間、ともに井戸の仕事をしてきた七十名近いアフガン人スタッフに退職してもらうことを意味します。幸いPMSは、辞めていく人々たちを手厚く遇しているのですが、辛い仕事とは言え、仕事はしやすいです。私自身は、個々の人たちの話を丁寧に聞いて、その将来を思いやることしかできませんが、「この数年間、給料は安かったけれどもPMSで働いて良かった」と心から思ってもらえるように、誠心誠意の努力をするばかりです。

▼事務局3階から6階へ移転しました▼

*二月、事務局が移転しました。同ビル内の引越越しですが、お便りされる場合はご注意ください。

▼83号の訂正とお詫び▼

*前号の中村医師の報告中に「EM」とありましたのは「AM」（国際医療援助）の誤りでした。謹んでお詫び申し上げます。

ドラエヌール診療所への ニーズが高まっています

ドラエヌール診療所受付 紺野道寛

増える来院者

ドラエヌール診療所の一日は朝七時五十分、受付業務をしている私が処方箋を配り出す事で始まる。基本は、土曜・月曜・水曜は女性診療の日、日曜・火曜・木曜は男性診療の日である。女性の日には女性の窓を、男性の日には男性の窓を先にあける。小さい窓口に患者さんが殺到し、「我先に」と人数分の処方箋を求めてくる。処方箋に患者の名前を書き入れ、処方箋一枚につき十アフガ



ドラエヌール診療所で受付をする紺野ワーカー

ニーか十二ルピー（約二十四円）を受け取る。一人で四枚五枚と求める人もいる。一日に百五十人から二百人、多い日は二百四十人もの患者さんが来る。だが共通語であるパシウトウ語が分からない人も多く、そんな時は片言のパシヤイー語（山の言葉）で話しかける。だがパシヤイー語はとても難しい。少し複雑な会話になるとお手上げとなり、その辺の患者さんを引っ張ってきてパシウトウ語に翻訳をしてもらう。特に子どもは学校でパシウトウ語を習っているため、立派な通訳になってくれる。

ドラエヌール診療所は、ドラエヌール渓谷のほぼ真ん中のカライシャヒ村にある。患者さんの多くは、上流から下流から数時間かけて歩いてくる。前日に家を出て、途中で一泊してくる人も稀ではない。最近では、クナール川沿いのPMSの灌漑用水路工事で「水が来る、生活が出来る」という噂が伝わり、バキスタンから戻ってきた人の来院が増えてきた。また、ドラエヌール渓谷の上流には二ヶ所に診療所があるのだが、山の患者さんはその診療所を通り越してこちらの診療所に降りてくる。どちらの診療所も、薬品が不十分だったり、処方箋を作るのが精一杯、のようだ。その診療所の医療スタッフは、昼の十二時半に門番を残し、自宅や宿舎に帰ってしまう。

毎夜の急患

PMSの診療所は、午前中に診療をし、十二時半以降翌朝までは急患のみを受け付ける。日本ではごくごく当たり前の救急診療だが、山岳地帯が殆どのアフガンでは、病院はおろか診療所さえない地域が多いと聞く。もし私自身の子供や妻（まだいないが）が病気になる時、すぐに駆け込め

る医療機関がなかったら……と想像するとかかなり不安になる。また、ドラエヌール以外に家があるスタッフは、「急患の時、二十四時間低料金で診てもらえるドラエヌールの人は幸せだ」と言ってくれる。その言葉どおり、住民にとっていざという時に頼れる存在であり続けなくてはいけないと思う。二十四時間急患に備えるというのは、見た目以上にハードである。酷暑の季節となり、マリアなどの患者も増えてきた。毎晩、二度三度「マリイズ（患者だよ）」と揺すり起こされる。辛い、今までそんな活動を十年以上黙々淡々と続けてきた先人のおかげで、住民からの信頼はとても厚い。それを壊さぬよう、かといって住民が依存しがちにならないように、クリニックの質の向上を目指していきたい。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となります。予めご了承ください。御願いたします。

▼記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*一部地域の方への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

ようやく人心地のつく 宿舎ができました

ジャララバード事務所会計 松永貴明

ようやく個室の宿舎が

アフガンistanに来て一年が過ぎた。やっとパシトゥ語で現地の人間とコミュニケーションがとれるようになり、会計の仕事にもわずかながら余裕が持てるようになった。今回、勤務開始以来初めて会報に文章を載せてもらえる機会を与えてもらったのだが、この一年間いろんなことがありすぎて、何をどう書いて、どうまとめて、どう報告すればいいのか困惑していた。悩んで悩んだ末、「セカンド・スタッフハウス」について書くことにした。ちなみに私の仕事である会計との関係はほとんどない。

昨年の終わり頃、水路事業などで日本人ワーカーの数が多くなってきたため、スタッフハウス（宿舎）では二人部屋が当たり前になってきていた。私自身も当時事務担当だった本田さんと半年近く同棲状態であった。気が合うもの同士だったのでそんなに問題はなかったが、体のでかいもの同士で多少なりとも窮屈な思いはしていた。

そんなとき「ただでさえ日本人にとっては窮屈なところで、こんな窮屈な生活をしていたら日本人同士でのいざこざが起こりかねん」という中村

医師の考えもあり、今年の一月から一人一部屋体制を目指し「セカンド・スタッフハウス」の計画が始動。と思ったら、案外早くいい物件が見つかった。平屋で五部屋あり、ファースト・スタッフハウスから歩いて五分程度とかなり近い場所。契約もほとんど拍子に進んで、二月初めにはもう賃貸スタート。そうするとすぐ住めるかというと、そうではない。もともとアフガン人が住んでいた家である。日本人とは生活スタイルが違う。シャワー、お湯が出ない。電気配線、電気が来ない部屋がある。台所、エントツと洗い場があるだけでほかはなにもない。守衛用のトイレがない。と改善しないといけないところがいくつかある。

そうなるに誰かがそれをやらなきゃならん。折りしも、水路事業は通水に向けて大忙し。水路現場の物品をアレンジするオフィスセクションも忙しくなる。会計は……そんなに劇的には忙しくはならんだろうということで、私が担当することに。オフィスセクションからこの物件を見つけてきたサブルとベシャワール病院の方から中村医師の元専属ドライバークン・ジャンが車ごと助っ人に来てくれて作業を開始した。

ドライバーならでは……!?

五部屋あるうちのひとつの部屋が一人部屋にするには明らかに大きい。「ちょうどこっちと向こうに出入口があるから、ど真ん中に壁を作って、部屋を二つにすればいい」ということで部屋の真ん中にレンガとセメントで壁を作って、一つの部屋を二つにしてみた。これが意外と狭くもなく広くもなくいい感じに仕上がった。これと同時に守衛用のトイレも建造。しかし、異常気象で降雨・降雪が一週間ほど続いたため作業が遅々とし



用水路D2地区にある水道橋

て進まず、小さい建物なのに二週間以上の時間が掛かってしまった。

なんだかんだありながら、バスルームには電気給湯器、キッチンには流し台や棚、各部屋にはカーペットやベッドを設置した。電気配線はジャラバード事務所のメカニックのザイヌッラーとナジブッラーのコンビで早々と作業を進め、発電機との接続も完了した。ほぼ完成に近づいたとき、

農業計画の一年

農業指導員 高橋 修

私は現地へは時々出かける程度で、もっぱら日本からの後方支援が役割です。従って生き生きとした報告ができないことをお許し下さい。

この1年、実にいろいろなことがありました。

まず嬉しいことは、家畜の飼料であるソルゴーとアルファルファが定着し、周辺の農家に広がってきたことです。玉蜀黍（とうもろこし）と大豆の適品種も目途がつきました。また昨年の秋には、試しに播いたソバが割合簡単に栽培でき、ソバの花と共に地域を潤してきました。何よりも嬉しいことは、現地のスタッフと農家が少しずつ独り立ちしてきたことです。

次に、現在なお試行錯誤を続けている課題についてご報告します。2003年から始めた甘藷（さつまいも）は、昨年も大きな芋が収穫でき、近隣の大人と子供が入り交じって歓声をあげ、全員で焼き芋、ふかし芋、大学芋を作って楽しみました。そこまでは良かったのですが、残った芋が黒斑病で腐ってしまうハブニングが生じたのです。このため昨年の末に急遽日本から種芋を送り、黒斑病対策を万全にしながら「今年も是非人々の歓声を聞きたい」、それを楽しみに現在再度挑戦している最中です。

2番目はお茶です。2003年の3月に植えた苗が1メートル以上に育ち、今年の3月に刈り揃え、切り落とした枝葉で焙じ番茶を作りました。お世辞も含まれていると思いますが、現地では大変好評でした。ところが2003年の11月に植えた苗は、昨年の夏頃から枯れる株が続出して歯抜け状態になってしまったのです。それで、急遽日本から種を送って歯抜けの部分と気温の低い北部集落に播種しました。現在残っている苗と新しく播いた種から順調に発芽しており、今年は“茶園”としての姿が見えてくると楽しみにしています。

3番目はブドウです。2003年に「ブドウは簡単」と考えて定植しましたが、生育が思わしくないので、この冬に株元を深く耕して根が伸びやすいようにしました。その結果、まだ一部ですがブドウが房を付けるところまで回復してきました。来年はかなり収穫できるようになると期待しています。

この他サイレージの不出来など、現在なおいくつか試行錯誤を続けている課題もありますが、また機会を改めてご報告します。

次に今年から新たに始めた活動を紹介します。まず、すでに成果が確認されているソルゴー、アルファルファの採種圃を設けましたが、ここで生産した種子を用水路からの通水地域へ配付したいと考えています。また新規に南瓜の試作を始めていますが、アフガンはメロンが世界一美味しい国ですので、同じ種類の作物である南瓜も間違いなく成功し、美味しい南瓜が食べられるようになると思っています。

終わりに、3年近くの間、現地で苦闘しながら農業計画を軌道に乗せていただき、今春帰国された橋本康範さんに対して、心からの謝意とねぎらいの言葉を贈り、報告を終わります。

ドライバーのカン・ジャンがセカンド・スタッフハウスの門の前でなにやら作業をし始めた。セカンド・スタッフハウスの前の道との間には幅1mほどのドブ川があり、生活排水が流れている。ちょうど門のところには小さな橋が架かってあって、人が渡れるようになっていた。カン・ジャンは人が通れても車輦が通るには十分

な幅ではないことに気づいたのだ。それで細長い大きな石をどこからともなく持ってきて、どぶ川に架け、橋の幅を広くしたのだ。私はスタッフハウスの敷地内のことだけしか考えてなく、そのことにまったく気づかなかった。車輦のこゝまで考えるとさすがカン・ジャンはベテラ

三月の半ばくらいには日本人が住めるようなセカンド・スタッフハウスに移住。私自身も移住した。一人一部屋体制がやっと実現した。セカンド・スタッフハウスはまだ住み始めたばかりだし、これから今まで見えなかった改善すべき点が出てくると思う。それはその都度改善していこうと思っている。

熱砂のアフガンで 「身体」を取り戻しました

灌漑水路計画担当

杉山大二朗

柳の植樹は深遠な配慮から

今年の二月からアフガニスタンの用水路造成作業に携わっている。小生の仕事は、主に水路両岸に漏水や決壊を未然に防ぐ役割を持つ柳の枝を植樹して毎日欠かさず水遣り（みづやり）を続けることである。中村医師から「水路の守り神は柳の枝。その成長如何に将来が懸かっている」と聞かされ、自分の携わる仕事の重要さに緊湊（きんぱん）一番、「やはり現場の仕事は予想を超えて厳しいものだ。」と得心した。会員の皆さんにはなぜ「柳」を植樹するのかと、疑問に思われる方がいらっしやるだろう。柳といえば日本人の心の琴線に触れるような、例えば福岡の柳川といった風情ある情景を連想されるかもしれない。されどこの柳という木は、単に美観の為に植樹されているわけではない。何よりその生命力と成長の早さ、そして根の食い込み頑強さが非常に優れていて、現地の自然環境に耐久できて比較的安価で購入しやすい。中村医師がこの機能的な柳の枝を選んだ理由が頷けるといふものだ。この柳の枝一つに対する配慮からも、これからの将来、地元民たちが自分たちで水路を補修拡張する際に、剪定した枝を使って事業を継続させてゆく

くという中村医師の深遠な戦略を窺うことが出来る。

さてその柳の枝を挿すやり方の説明であるが、挿し方は実に簡単だが、水路の両側に挿してゆくので相当の数である。砂はなくても水さえあれば成長する柳、ここがポイントで如何に水が無駄なく吸収させるかをまず考慮しなくてはいけない。溝を掘って保水性を高め、水の揮発防止にビニールで溝を覆うなど、乾きやすい風土に対する手段をあれこれ思索するのも嬉しいものだ。

新参者への「洗礼」に体で「返礼」

自然との闘いと言えばカッコいいが、昔ガキの時に遊びで培った経験が結構役に立っているのには驚いた。毎日の水遣りは手作りの筏（いかだ）を水路に浮かべてポンプで散水する。筏に乗って水路を下るのもちょっと風流（ふうりゅう）で乙なもの。今度休みの日に釣りでもしてみよう、泥鰌（どじょう）が釣れるかも？

広範囲な水路の水遣りの為には、現地レイバーを区分け分散させ、各リーダーを筆頭にチーム編成など組織作りから始めなければならぬ。現地言葉も満足に喋れない新米の若造が、それこそ自分の父親よりも年配のオジイちゃん達に指示を出すというのも難しいもので、現場に来た当初は当然の如く訾められた。まあこれも新入りの洗礼（せんれい）とも言えるだろう。



杉山ワーカーが描いた用水路の様子

しかしこちとら訾められたぐらいで大人しく引っ込むほど育ちは良くないので、筑豊の川筋氣質を全開にして大いにぶつかり合った。このアフガンでは理屈は通じない、ましてや此方はパシュトゥ語を喋れない。されば此方の働く姿勢を彼らに見せて一緒に汗を流す他ないと腹を決め、自分でスコップを持って現場指揮を取るやり方を彼らから学んだ。

スコップを振るついていると不思議と身体の中で何かが、**迸（は）**るような錯覚を味わう。徹底的に乾いて清浄で透明な、鼻腔にほんの少し甘い味を残す熱風。無機質ではあるが、触ると手の汗を吸い取るうとする貪婪（くろば）で無表情な土質。靴の中で不協和音を謳（うた）う砂埃。濁（にご）ってはいいるが、もの言わず絶えずうねり、澎湃（はげ）と飽くなき変化を愉しませる水路の水。五感を通して絶えず自分に何かを問いかけているような気がしてならない。

昔、実家の畑仕事の手伝いをしていた感触を思い出した。夕暮れ時まで土に塗れて疲れきっても、何かわくわくするのを堪え切れずにがむしやらになって働いたあの頃を。漸く手と足を

*任務終了にあたって

大工事から買い物まで、
全てに助け合った二年間

ペシャワール事務所 鈴木祐治

願いを結集する灌漑用水路

現地に来た当初、私はダラエヌール診療所の受付にて患者さんへ診察券を配布するという仕事のため、すぐにアフガニスタンへ向かうことになりました。

そこでは国語の一つであるパシトゥ語と、その地域に住むパシャール族独特の言語が使われており、勤務日当日から診療を待つ大勢の現地の人達に囲まれ、私が外国人であることなど問答無用で勢いよく話しかけられた時には、正直、「この人達の言葉が理解できるようになるのだろうか?」と尻込みしたのを今でもよく覚えています。初めの頃は覚えてたの単語を使い、紙に絵を書いて説明してみたり、身振り手振りを交えて意思の疎通を図っていましたが、三ヶ月ほど経つと、ようやくこちらの伝えたい事と、相手が伝えたい事を、知っている単語を繋ぎ合わせて、言葉での

このアフガンで取り戻せた気がした。等身大の自分を取り戻したとも言えるかも知れない。頭だけで自然に向き合うより、小手先の通じない自然という相手と、手と足を使ってがっぷり対

コミュニケーションが図れるようになりました。これは私の努力の成果ではなく、私がパシトゥ語を理解できない以上に、彼等は私の目茶苦茶なパシトゥ語が理解できなくて苦労していたはずであり、それでも嫌な顔をせずに教えてくれ、彼等もまた私の言いたい事を理解しようと努力してくれたことにあると思います。

その後、臨時で水路建設の作業に携わった時期があります。そこで働く人達の多くは地元の農民ですが、その中には現金収入が無く、ケシ栽培で生計を立てていた者、仕事がなく、それまで軍閥に雇われコマンドーと呼ばれていた人達、元タリバン兵など、様々な経歴を持った人達があり、子供からお爺さんまで、兄弟、親子、親戚連れでやってきていました。

用水路現場へ働きに来る人達の思いは様々で、自分の村や、家族、友人の住む村に水が来ると信じて働く者、日々の生計を立てるための貴重な日当百アフガニ(約二百四十円)のために働きに来る者、学校をサポートしてひょっこりやって来る者などなど。それでも、「自分達の国は自分達の手で」という思いは共通して感じられました。疲れ知らずの屈強な愛嬌たっぷりの男達の必死に働く姿は、物事が上手に運ばずにへこたれそうになった私を常に支えてくれました。

「最安値」「良品質」「好条件」を旨に

パキスタンのペシャワールへ勤務場所を移して

話出来たことが何よりの収穫であった。このような貴重な機会を与えていただいたペシャワール会会員の皆さんに感謝する次第です。改めて多謝を。

からは、薬の管理業務、水事業、農業で必要な物品調達の仕事に当たりました。主な購入物品は、用水路の護岸に使用する麻袋、蛇籠を編む為の亜鉛めっきワイヤー、コンクリート工事の為のミキサマシン、お茶栽培の為の土壌調整に使用する鶏糞など様々です。

購入とひと言でいっても、日本のようにお店に行ったら商品が綺麗に陳列されているわけではないですし、お店側で準備ができないものでも注文欲しさから、「準備できる」と自信を持って言い切られることが多いのですが、実際にはこちらの注文通りの物が手に入ることは稀で、そう簡単に人や物を信頼して購入ができるわけではありません。むしろどこか騙し合いの感が強く、毎回苦労を強いられています。

購入では、「最安値」「良品質」「好条件」(保証や仕上がり期間など)、これらの条件が揃うお店を見つけて出すことから始まります。マーケットにあるお店を一軒一軒訪ねて回っては、店主と話をし、人柄を視察し、品質を確認し、その品物に対する情報を得て、一言値段を聞いていきます。それを同じように全てののお店で繰り返して、ある程度の商品知識、相場を確認した上で、また一軒ずつ回って値段交渉をし、見積もりを取り始めます。その後さらに、総合的に良い条件のお店を幾つかに絞って、取った見積書を持って最終的な値段保証交渉を行います。直接アフガニスタンへ発送する場合は、輸送会社でも同じような手順で見積

もりを取りに回ります。また、ペシャワール市内で見つからない、値段が異常に高い場合などには、ラホール（バスで八時間）や、カラチへ（バスで二六時間）探しに向かうこともあります。使わせて頂いているお金は大切な寄付金であることを旨に、私達は一ルピーでも安く買おうと必死ですが、お店側も一ルピーでも高く売ろうと必死であるため、お互いに無い知恵を振り絞っては上手いことを言っておまかし合います。交渉がうまく進まない時には、「まあ、まあ、ちよつと落着こうや」と言ってお互いのチャイ、もしくは冷たいペプシを飲んで一時休戦とし、飲み終えると再び折り合いのつくところまで時間をかけてじっくりと戦います。

購入の仕事で現地人同士のやり取りを見ているうちに、私自身にこんな隠れた才能（二重人格？）があったのかと思うほど、今では一丁前にパシウトウ語で荒々しく捲し立てられるようになりました。「言つたものの勝ち」のこの世界では、こちらの言いたいこと（条件）を、相手が納得できるように話を作り、「イエス」と言うまで相手の話には一切耳を傾けずに強気に、時にはフレンドリーにひたすら話し続ける、というのが一つのコツではあるようです。しかし、これにも一長一短があり、こちらが求める以上の良い条件を提示してくれることもあれば、「あんたにはもう絶対に売らない！」と逆に拒否されて困ってしまうこともあります。

「お前はカンジューズだ！」

こういった手順を踏んでようやく商品の注文に至りますが、大抵は約束の日に仕上がることはなく、だからといってただ急がせて作らせ

ば、とんでもなく粗悪な品物が用意され、さらに時間が掛かってしまうことも少なくありません。

ペシャワールで物品調達に向かう病院側の پاکستان人、アフガン人職員も様々で、交渉事に長けたドクターやナースもいれば、機械部品に知識豊富な運転手、とにかく押しだけは強い一般事務職員までいろいろとおり、各々病院側での仕事を抱えてはいますが、忙しい中でもなんとか仕事を整理して、アフガンプロジェクトの為に駆けずり回ってくれています。

しかし、現地人だけで購入に向かうと、早く帰りたいがために根気よくお店を回らずに品物を選んでしまったり、知り合いのお店で若干高い値段で買ってきたり（安く買ってきたこともある）、品質確認の甘さなどの問題が起きます。逆に、日本人が先行してしまうと、外国人ブライスを吹っかけられて相場がはつきりと掴めず、交渉どころではなくなることも少なくありません。お互いが根気強く尻を叩き合つてやつとのことと、なんとか満足のいく結果に辿り着くのです。

こうして仕事が上手くいった晩には、いつもよりもちよつとだけ奮発して、一杯十五ルピーもする（普通は十ルピー）、牛乳たっぷりのスペシャルマンゴージュースを二杯注文して祝杯をあげます。こういうときにしか奮発してあげない私は、有難いことに皆から「君はPMSで一番のカンジューズ（けち）だ。」というレッテルを最後まで貼られ続けてしまいました。

真情をぶつけよう

二〇〇三年六月にこちらに来て以来、この七

月で丸二年となり、現地での仕事を終了させていただくことになり、現地のスタッフ達に少しずつそのことを打ち明け始めているところですが、皆に「言葉も覚えて、仕事も覚えて、これからなになんでも帰ってしまうんだ!？」と言われる度に言葉に詰まります。私の都合で来たいときに来て、帰りたいときに帰るというのは、皆に納得のいく言い訳ができるわけもなく、どこか自分勝手な申し訳なさを感ぜずにはいられません。

言いたいことは何でもはつきりと言いたいときは素直に怒り、笑いたいときは腹いっぱい笑い、他人の悲しみは皆で分かち合い、仲間を思いやり、家族、兄弟を何よりも大切にすること。時には仕事上で嘘や理不尽なことを言われて、喧嘩をして嫌になることもありましたが、それでも困っているときには親身になって助けられ、不思議と憎むことのできないざつぱらな人間味溢れる人達でした。そんな彼らと僅かな時間でも一緒に過ごせたことを何よりも幸せに思うと同時に、支え続けてくれたことに感謝しています。

この活動に理解をよせ、根元から支えて下さっている、日本のペシャワール会会員及び、寄付者の皆様、事務局の皆様、そして、中村先生、藤田さんを始めとする、現地日本人ワーカーの皆様さん、現地で一緒に働いた多くの人達に、二年間という僅かな時間ではありましたが、この場を借りて心より御礼申し上げます。

日本に帰国後も、一会員としてこの活動の小さな支えの一つになりたいと思います。

本当にどうもありがとうございました。

*現地スタディツアー体験記

用水路は想像を 超えるスケールでした

ベシャワール会事務局員 井上龍一郎

「NGOの仕事じゃない」

「わあっ、これは民間NGOの仕事じゃないぞ。国家的な事業ではないか。よくぞここまで……」

ベシャワールのPM病院、アフガニスタンのダラエヌールの診療所、農業試験場。そして井戸、用水路の作業現場。どこに行っても、何を見てもただただ驚くばかりだった。ビデオや写真で何度も見た風景であったが、現実の世界はそれまでの概念や先入観をふつとばしてしまった。

PM病院での毎朝の受け付け窓口の光景は忘れられない。二十ルピーのくしゃくしゃの紙幣を握り締める患者さんたち。小さな受付窓口から、我先にと差し出される瘦せた手。みんなが救いを求めている。みんなが病院を頼っている。二〇ルピーを握りしめたその手に私の心は驚愕（おどろ）みされたように感じた。

クナール川は雪解けの水をたたえ、悠々と流れていた。土地には高い低いがある。クナール川の東側は川より低い。そこには青々とした麦畑が広がっていた。一方西側は川よりもずいぶん高い。

大小さまざまな石がごろごろとした広大な砂漠であつた。

水さえあれば、目の前に流れるクナール川の水が引ければ畑ができる。この地の農民たちは悔しい思いで川をながめていたのではなからうか。悠々と流れるクナール川を目の前にしてなす術がないのだ。岩石の砂漠に立つてその悔しさが実感された。

水さえあれば、水さえあれば生きていける。

あの有名な「おぼけ井戸」。直径五mの巨大な灌漑用井戸。写真では何度も見た井戸。その井戸の周辺の土地には麦畑が広がっていた。麦は元気に育っていた。多くの収穫が期待できそうであつた。わがことのようにうれしい気分になった。

井戸の壁面はきれいに石を積み、補強されているように思っていた。写真ではそのように思えた。しかし、石を積み上げたのではないことがわかった。逆に石の層を掘り進んだのだと。『医者井戸を掘る』には、そのところが詳しく書かれているが、実際に目の当たりにすると、その作業の苦労たるや驚きである。

そして畑に水が引かれたときの喜びはどれほどのものであつたらうと涙が出そうだった。

苦闘の跡に言葉を失う

用水路建設現場は想像をはるかに越えていた。目の前を流れるクナール川であるが、土地の高度差はなんともしがたい。水は高いところから低いところへ流れるものであるからしかたがない。だから、その土地は今まで雨水だけが頼りの細々と

した農業を行ってきたのだろう。

クナール川は背後の六千m級の山々から流れてきている。ならば、その土地より高い地点から用水路を掘り始めるとクナール川の水をその土地に流すことができるではないか、との発想のすばらしさ。スケールの大きさにびっくりした。何千年もその土地で生きてきた人々の誰ひとりとしてそのようなことを考えた人はいなかったのだろう。それが、現実の用水路として目の前にあつた。それを中村先生を中心としたベシャワール会のワーカー諸君と現地民だけでやりとげようとしているのだ。驚きを通りこして、言葉も出なかった。

岩石の山を削り取って水路を確保する作業、その山に登って水路を見下ろしたとき、その苦労が思われた。山膚をうめたてて、土をかため、そこに水路を作ったアイデアと苦労。そのような豊かな発想と工夫と苦労があらにこちらに見て取れた。ほんとうに「ほううつ」としか言えなかった。

もう現地では五〇度を超す暑さになっているだろう。その過酷な状況下で頑張っている人々をささえたいと思った。何よりも救いを求める患者さん達。灌漑用水を待ち望む農民たち。その人々のほんの少しの役に立てたらいいなと感じた。

事務局の仕事も大変である。丁寧な誠実な作業が毎日行われている。自分にできることを精一杯行っていきたいと思っている。事務局のみなさん「猫の手」程度の私ですがよろしくお願いいたします。

ジャララバードでのワーカー諸君との交流会で事務局のOさんが「百聞は一見に如かず。百見は一考に如かず。百考は一行に如かず」と言われた。それを受けて、中村先生は「百行は楽しむに如かず」と続けられた。なるほど。

憧れのシスターに会えて

ベシャワール会事務局員 溝口博子

笑顔はダメ、男性に近づいてはダメ、体の線が出る服はダメ等々……自由に育った女性にとっては、何と大変な国である。そんな所で十五年以上も、看護師の仕事をしている藤田千代子さんは、どんな人だろう。帰国した彼女に、何度か会っているが、想像がつかなかった。

四月一日、村上事務局長を団長に、事務局員十名で、現地視察（見学）旅行に出発。翌二日から十日間ずっと一緒にいて分かったのは、「鉄の女性」でも何でもなかったこと。彼女はスタッフハウスの自室で「パビー」と名付けた野良の子犬を育て、白衣の下には、紺地に白い花模様のワンピースを着ていた。何もかもが普通の日本女性である。

しかし、自然に現地の人たちの中に溶け込んでいる。しかも病院運営から、「緑の大地計画」まで、日本人ワーカーや、現地スタッフを、てきぱきと指導、指示をする。全く以て、中村哲先生の女性版のような人である。現地の人たちから「シスター」と慕われている彼女を見ると「ドク

ターサーブ」と呼ばれている中村先生と重なってしまう。

中村先生がPMSの病院を離れ、アフガンの井戸掘りや用水路事業に全力投球できるのも、藤田さんの院長代理としての陰の力故である。十日間、彼女と一緒に行動して、現地の色んな話は聞いたが、彼女自身の苦労話など、一言も聞かなかった。

私たち（女性三人のみ）は、彼女のお陰で、大変貴重な経験を、いくつかさせて頂いた。その一つはガラエヌールの診療所へ行ったときのことである。その日の診療がたまたま女性患者の診察日で、患者は女性とこどもばかり。待合室（庭にある小屋）に入り、彼女に群がる女性達の中でひとりの中年女性を見つけ、ひとことふたこと話すと、その女性が、笑顔で私たちに話しかけ、手を差し出してくれるのである。用意した飴を配り、みんなと一緒にギューギューずめのイス代わりの台に座り、手を握り、赤ん坊を抱き、お互いに通じない言葉で話す。でも、心は通じ合ったような気がした。

この患者の中には、春に譲渡されたヌーリスターの診療所の近くからも来ている人がいるとのこと。病身で遠い道のりと思うと、中村先生の無念さが、ひしと感じられた。

旅も終わりに近づき、アフガン最後の夜、ジャラバードのホテルで、ワーカーたちの慰労をかねた夕食会があった。

「百聞は一見に如かず。本当に来て現地をこの目で見て良かった」と私は感想を述べた。同行のO氏は、中村先生はじめ現地スタッフの行動を「百

聞は一見に如かず。百聞は一考に如かず。百考は一行に如かず。」としめくくった。

私たちは、中村先生はじめ、藤田さん、坂尾さん（三年前から検査技師として、活動しているもう一人の日本女性ワーカー）、そして多くの現地のワーカーたちの、勇気ある行動に、胸を熱くして帰路についた。



PMS本院で。二列め向って右端が藤田看護師、同列右から4人めが溝口さん

アフガン閑話その2 クーチー

灌漑水路担当 鬼木 稔

多民族国家のアフガニスタンにクーチーと呼ばれる人達がいる。彼ら一族は遊牧の民である。現在でも人口の約80パーセント以上は、農業に従事する人々で、あとは商人と僅かのサラリーマン、遊牧民は数パーセントに過ぎない。

水さえ豊富ならば自給自足の生活を優雅に営んでいけるであろう人々だ。西洋文化への憧れと共に、必死に「豊かさ」を追い求めて突っ走ってきた私達日本人も、残された一部の地域ではあるが、この長閑な風景に接すると、かつての良き日本の原風景を見る思いがし、安堵の気持と親近感が湧いてくるのは私だけだろうか？

夏の間は全く彼らを見掛けることはなかったが、朝夕が冷え込んできた10月初旬のある朝、突然暗闇の通勤路でヘッドライトに浮かび上った。大きなラクダの背に家財道具一式を積んで、家畜と共に移動してきたクーチーの姿に目を見張った。いや感動すら覚えた。それは仕事場と宿舎を往復するだけの、単純な毎日に、変化を見たからでもある。翌日も翌々日も、申し合わせたかのような同じ時間帯に、家畜の群を引き連れて、涼しかった高地でひと夏を過ごしてきたクーチー家族の移動光景が見られた。ラクダ5、6頭に家財道具一式を乗せ、ロバの背に赤ちゃんや鶏をくくりつけ、年少の子供や女性が手綱を引く。羊の群は男達や、少し大きな子供達が誘導している。合わせて8、9人、これが平均的な家族構成か？

私達の用水路現場の直ぐ近くにも、とある朝、忽然と彼らのテントが出現した。岩石砂漠の中にテントが張られ、羊の群に混じって、ロバやラクダが放牧される。不毛と思われる岩山でも、目を凝らしてよく見ると、トゲのある草や雑草が所々生えており、裏手に連なる岩稜から100頭以上もの羊の群を追った、クーチーの姿を何組も見掛けることがある。その踏み跡は地雷探知機による探査より、はるかに成果を上げているものと思われる。

人口比世界一の牧畜の国、ニュージーランドでは、緑豊かな牧草の中で、羊の群が育まれている風景が、国土全域に広がっていて感嘆したものだ。もしニュージーランドの牧場主が、この国の風景を見ると、放牧なんて絶対不可能だと、言下に否定するに違いない。私の目から見ても、この両国の全く異なる環境のもと、草木一本見当たらない丸裸状態の岩山で、家畜が飼育できるとは、さらに大きな感嘆の声を上げざるを得ない。涸れ川と砂漠を渡り、ロバの背にポリタンクを積んで、水を汲みに行く仕事は女性と子供達である。彼らにとって、幾世代も連綿と続いてきたであろう、遊牧の生活は、まるで自由の象徴のように見受けられる。どこかのNGO関係者が見たら、子供の学校は？ 教育はどうなっているのだ！ と額に青筋を立てて、叫び声を上げるかも知れない。しかし詮索はやめよう。子供達は立派な働き手として、生活の術を会得している。道徳や教義はコーランの教えを、長老達から学んでいるのだ。生き生きとした子供達の間を見と、逆に日本の子供達の覇気のなさを感じる。そしてある朝、来たときと同じように忽然とテントが消えている。自由闊達な彼らの生きざま、むしろ私達が金銭や財産の保全で、身動きがとれない状態のほうが、不幸せかも知れない。彼らを見ていると、そんなことをふと思ってしまう。それと共に、26年間も続いている戦火のアフガンに、真の平和が一日も早く訪れることを願わずにはいられない。

表紙をめくる小さな物語47

ブルブル・サイードとサルタン

甲斐大策

暮れたばかりの淡い闇の中、屋敷全体にめぐらされている、赤・青・黄・緑の豆電球が灯り、子供達の歓声が上った。

「さあ回るんだサルタンよ！ 今宵、神の御加護に包まれて、力の若杉は、光の薔薇を迎えるそうだし、ああムアラク、目出たいことよ……」

柄のついた小石入りの空き缶を手に、マレー熊サルタンはゆるりと二本脚で立ち上った。ブルブル（夜鳴鶯、詩を唄いさすらう者の意も……）・サイードは、さらに声を張り、同じ詩句を唄う。サイードのタンバリンに合わせサルタンはその場で回転し始めた。「さあさあ回れ、サルタン。若獅子の婚殿たくましく、光る瞳はトバーズの……」

ハイバルのランディ・コータルからアトック、北へマルダン、コヒスタン近くまで、ブルブル・サイードは詩を詠じて旅する。しかし人々は、熊つかいのサイード、としか呼ばない。サルタンには、たどたどしく回る以外の芸がない。詩を詠じてもサルタンが旋舞を演じて、路傍で通行人の足を停めるのは無理である。村や街の祝いごとに寄りすがるしかない。

楽師達の華やかな歌声と、アルモニアムや絃の音と人々のどよめきが庭から湧き上り、大太鼓の響きが屋敷正面の鉄の門を震わせた。踊りが始まったのか、指笛と掛け声が歌に交差する。

くまなく堀に這わせた有刺鉄線に絡んで、カバブを焼く煙と香りが流れてくる。

通行人にも振る舞う飲物が門の横に用意される。使用人がサイードに眼くばせをした。飲物と共に、いくらかの心づけが置かれたらしい。

サイードは唄い、サルタンは、ゆるゆると回る、回る、回る……。

中村哲医師の本 空爆と「復興」



—アフガン最前線報告—

9.11テロ直後から2003年
年末まで、中村医師と
現地日本人スタッフから
届いた、鬼気迫る活
動報告集【2刷】1890円

辺境で診る 3刷 1890円 辺境から見る

ダラエヌールへの道 2100円
【3刷】

医者 井戸を掘る 1890円
【9刷】

医は国境を越えて 2100円
【6刷】

ペシャワールにて 1890円
【8刷】

聖愚者 甲斐大策 の物語



表紙をめぐる小さな物語
が、書下しを加え一冊に
1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092 (714) 4838

アフガニスタンの
1260円 診療所から

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
TEL 03 (5687) 2670

ペシャワール会報
「合本」1983～2004

B5判上製1300頁
注文は直接事務局へ 10500円

価格はすべて税込価格(税5%)です

●事務局便り

*五月十一日、アフガンに入った。沿道は黄金色に実った小麦が刈り入れの真つ最中である。早魃の終息を期待させる麦秋の風景が続く。その日、ジャララバードの手前一時はどのマルクバザールに差し掛かった時、封鎖線に阻止された。軍人が言うには、ジャララバードで数千人の群集による反米暴動が起こり、すでに数人の死者が出ている。ただちに国境へ戻れと言う。中村哲医師は、「待ちましよう」と言いつて、チャブリカバブを喰っている。待つこと二時間、封鎖のとかれたバザールを突破してジャララバードのスタッフハウスに着いた。この日の反米暴動でバキスタン領事館は炎上、国連機関も襲撃されたスタッフハウスの隣は国際赤十字の事務所だが、窓ガラスが粉々になっている。反米暴動は、キューバのグアタナモ刑務所でのコランに対する侮辱事件報道が切っ掛けだった。ブッシュ政権は、アフガンやイラクであったかも米国流民主化が成功しているかのごとく喧伝するが、それは民衆の思いとは程遠いところにある。この暴動は、その現れの一つに過ぎない。翌々日早朝、用水路の建設現場に行った。砂漠が緑に変わりつつあり、蛙も鳴いている。灌漑が始まったのだ。七時頃、用水路近くに出来た小学校に子供達がやってきたがすぐに帰り始めた。聞くと、先生たちが「反米集会」に出かけて臨時休校だと言う。この小学校、USエイドというアメリカの資金で

出来た学校である。

*前号で、ダラエビーチ(オキナワ・ピースクリニク)とワマの診療所が「活動停止」したと報告しましたが、これは診療所の「閉鎖」ではなく、諸事情による現地行政への「譲渡」です。診療は行われていますが、現地住民の不満は大きく、PMSへの再開陳情があります。

⑥村から

旅の途中で時々とつても困った事になるのは「公衆トイレ」がないこと。今回もカイバル峠の国境越えで「ない」。ジャララバードの事務所までは一時間近くある。だいたいようぶかと思いつつ、目に飛び込んでくるのは早魃の荒野と思いきや、山頂まで続く草原と黄色や紫などの可愛らしい花々。スイスアルプスの花畑とまでは言わないがうれしい「ハズレ」である。でも内心は浮かれも半分。あとで知ったことだが、そんなときは男性が場所を探して隠れてくれるのでいつでもOKだそう。どういう状態になるのか興味津々だが、想像つかない。次回はぜひ体験のチャンスをお願い。このように日本の何でも自由とは異なり、女性ならではの不自由(?)さも、逆に女性だからこそその視点もあって、アフガンは体験の宝庫。皆さんもぜひチャンスがあれば異文化の体験をお勧めしたい(Riki)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年の一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一五 上村第二ビル六〇三号 TEL 七三一一三三七二) 内におく。

発行所 ●ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル603

☎ (092) 731 (2372) FAX 092 (731) 2373 郵便振替 01790-7-6559

発行日 2005年6月29日 No.84 会長 高松勇雄 現地代表 中村哲 事務局長 村上優